

京都大学
中院文庫本

三條西公条講未来記雨中吟聞書

解題と翻刻

佐藤明子
森本晋
中村健史

解題

1

ここに紹介するものは京都大学附属図書館中院文庫に蔵される未来記及び雨中吟の古註釈書「三條西公条講未来記雨中吟聞書」である。

本書は称名院三條西公条の註説を聞書して成ったものであり、百人一首、未来記、雨中吟の註釈が一書にまとめられている。このうち百人一首部分に関しては、既に赤瀬知子氏が「百人一首注釈書叢刊」2（和泉書院）に「京都大学
中院文庫本百人一首聞書」として翻刻のうえ、解題を書いておられる。それゆえ、以下書誌的事項についてはこれを参照しつつ、

概略を示すのみにとどめたい。

底本の書誌は下のごとくである。京都大学附属図書館中院文庫所蔵。請求記号VI 137番。「縦25・0 cm×20・3 cmの袋綴写本一冊である。表紙は渋引表紙で、本文料紙は楮紙、見返しも本文共紙」（赤瀬氏解題）。外題は剥落して存しないが、見返しに「聞書詠哥大概注 百人一首 未来記 三部書 注私虫喰」と記す。百人一首、未来記、雨中吟の順で聞書がまとめられており、百人一首聞書が墨付三十五丁、未来記聞書が同十丁、雨中吟聞書が同五丁。各々の内題は「百人一首聞書」「未来記」聞書并 批注 丁簡之「雨中吟」。「書写年代は江戸時代極初期かと思われる」（同前）。なお全丁の画像が京都大学電子図書館のサイト上に公開されている（<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>）。

識語は翻刻のとおりであるが、これについて赤瀬氏は次のように記す。

三条西公条（称名院）の注説を聞きとめ、そこに三条西実枝の注説を頭注や付箋の形で書き加えたものとみられ、また、その成立は永禄三年（一五六〇）以前と考えられる。識語を記した泛梗は、大徳寺第五百十九代の賢谷宗良（一五六一—一六二一）と思われる。土佐の出身で俗姓は吉良氏、同世代に吉良峰城主の吉良宣経（生没年未詳）がいるが、関係は未詳。玉甫紹琮（一五四六—一六一三）の法を嗣ぐ。勅諡本覚広濟禪師を賜わる。

いくつか補足を加えると、百人一首部分とは異り、未来記、雨中吟の聞書においては、付箋が一枚もなく、頭註も引用歌の出典を註するなど単純なものが多い。氏の説くところに就くならば、これら二書においては公条の註説が中心となり、実枝のそれは補足的な部分を出でざるもののごとくである。

賢谷宗良は足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』第三編第六章第二節（日本古典全集刊行会）及び『国書人名辞典』（岩波書店）の該項にその伝がある。なお解題中挙げるところの吉良宣経は南村梅軒の弟子として知られる人物であるが、賢谷とは世代が異なる。宣経の子が宣直。宣直の代に至

って吉良氏はひとたび滅び、後に長曾我部元親がみずからの弟親貞をしてその家名を継がしめた。右二書によれば賢谷は親貞の子蓮池親実の異父兄とある。

伝本として底本のほかに京都大学文学部国語学国文学研究室所蔵本（国文学 E1）があり、百人一首聞書の内容から、赤瀬氏はこれについて「後者（引用者註。文学部本）は、前者（同。中院文庫本）の付箋部分を本文に取り込んだ形式をとっており、そのことからみても、前者あるいはその転写本を忠実に書写したものと考えられる」としておられる。（二）

未来記、雨中吟部分における文学部本の態度は、中院文庫本に見える頭註、傍註をそのままのかたちで筆写し、註文に疑義がある場合にも私意に改めず、欠字にしておく（未来記三四番）など、総体として祖本尊重の態度がつよい。その性格は、右解題における指摘と軌を一にするものといえよう。

ただし中院文庫本には、「及第」とあるべきところを「九題」、「宗尊親王」とあるべきところを「崇尊親王」とするなど、意味の通じない漢字の宛てかたが散見され、文学部本ではこうした文字遣が正しいものに改められている。

また中院文庫本において朱で記された句読点、濁点、合点等の記号はすべて省略されている。両書の校異を翻刻に付

してあるので、くわしくはそれを参照されたい。

2

未来記聞書の冒頭に「聞書并 祇注 了簡之」と記されるように、本書の註説には宗祇の影響が大きい。「祇注」すなわち遠情抄（一名未来記雨中吟聞書）のことで、東常縁の講釈を宗祇が聞書したものと云われる。これが三条西家に伝ったことについては、実隆公記中明応元年十二月条に

七日晴、今日宗祇法師定家卿未来記五十首、雨中吟十七首等読之、上原豊前守、四宮、斎藤々兵衛等来聴、

（下略）

十九日晴、（中略）未来記聞書銘（遠情抄、故東常縁自書銘部抄送之）可染筆之由

宗祇法師所望、仍書遣了、

とあり、遠情抄伝本のうちには

右宗祇法師聞書也。東常縁一説之处、称神妙之由、号遠情抄、自書銘与之云々。此本則所押彼銘也。先聞講談之後、予聊雖有抄出之事、重而借請此本今書写者也。

明応四年二月十八日 在判

（宗祇本云）以逍遙院自筆之本写者也。

文祿四年二月廿日 自神武百数代末孫和仁 廿五才

という奥書を持つものがあることから徴しても、ほぼ疑問の余地はあるまい。⁽¹⁾

本書の註説は概ね遠情抄所伝のものをそのまま、もしくは短くまとめなおして記したものであり、なかには註文が遠情抄と完全に一致するものもある。未来記四番歌に対する両書の

しら雪あをき、先以外のつゞき也。をみの衣をきたる御かりばといへる、此小忌の衣は、きる事おり／＼にかはる事侍るにや。いづれも神祇たるべし。かりばにをみの衣きたること、きかず。たとへばをみの衣とは、地のしろきに青ずりをしたる物也。若草の雪にもえ出たるを、小忌衣にゝせたる、さらにつきなくや。一向哥のすがたにあらず。尤心可憚鉢也。青といふ詞、又よろしからず。⁽²⁾

（遠情抄）

白雪のあをき。先以外のつゞき也。をみの衣をきたる御狩場といへる。此小忌の衣は。着する事折々かはる事也。いづれも神祇也。かりばに小忌の衣きたること聞ず。たとへば小忌の衣とは。地の白きに。青ずりをしたる物也。若草の雪ニ萌出るを。小忌の衣に似せたる。更につきなき事也。一向に哥のすがたにあらず。尤心はゞかるべき鉢也。あをきといふ詞。又よろしからず聞えたる也。（下略）

（公条聞書）

といった記述は、祇註を忠実に継承しようとする公条の態度をよく示すものであろう。

公条聞書と遠情抄の相違について、特に目についたものをまとめると以下ようになる。

一。未来記二六番（家隆歌）、三三番（西行歌）、三六番（和漢朗詠集所引白賦）、四五番（家隆歌）、四六番（好忠歌）、四七番（家隆歌）、四八番（定家歌）のように、遠情抄で一部しか引用されていなかった和歌詩文を、全文に改めたり、あるいは作者名を追補した例が見られる。その一方で、遠情抄にない本歌や典拠を指摘したものは未来記三〇番（後鳥羽院歌）、雨中吟一七番（家隆歌、後鳥羽院歌）の二例にとどまる。

二。本書が独自に加註を行った部分は、その性格から二つに分けることができる。その一。未来記二番（くくせたる詞也。替るみちもなうて。読出る是也）、六番（言語道断のあしきすがたなり）、一一番（きくにききなり）、一七番（きくにくし）、二二番（能々工夫すべし）、二八番（よくく分別をくはへて吟味すべき事なり）、雨中吟二番（是も愁の鉢也）、七番（能々吟味すへし）のごとく、感想的なもの、詞のしらべや歌のすがたといった感覚的な部分から批判を加えたもの。これらは基本的に「哥は風脉のあしきを嫌こと」（雨中吟聞書序）という立

場からの加註であって、態度としては遠情抄のそれを踏襲したものである。

その二。未来記八番（天津空行花のしら雲。悪き詞也）、一二番（夜のほど云こと葉。以外云々あしきなり）、二七番（露のよすが悪也）、雨中吟五番（うかぶとかこつ雲にてこそあるらう也）、一〇番（ならの木の葉。木の字不_レ人事を人たる。おもしろがらせんと心か）のように、祇註では触れられることのなかった表現について批判を加えた例。これらは遠情抄の欠を補いながら公条個人の見解を述べたものではある。しかしその内容は、未来記、雨中吟を悪歌の見本とする立場からのごく単純な批判であり、本書独自の註説とまでは言いがたい。

その三。公条独自の説としては、以下の五例を挙げることができる（順に未来記四番、一五番、一九番、雨中吟二番、一二番の註）。

- (a) 是も詠哥大概に人未求詠_ト云所を。いかにも新しくしなさんとて。あしく案ズレハ如_レ此なるなり_{云々}。
- (b) 水海に大和田一かう不_レ似合_レ湊ノやうなる所にある也。水ノめぐるやうなる所也。
- (c) 日本記にとよみどよむと在_レ之下のをば濁て読也。せみのどよむ。一かう不_レ似合_レこと葉なり。
- (d) 此歌を風雅集に被_レ人たる也。二条家などには。風

雅玉葉などは。手にも取まじき事と也。未来記の中の歌を入らるゝ事以外也。

(e) 色暮て当時はやる詞也。惡詞也秋の松風春の松風など惡也。

未来記、雨中吟の古註釈のうち、本聞書以降の主要なものとしては未来記雨中吟御抄（後陽成天皇）と未来記雨中吟聞書（中院通茂）の二書があげられる。右に引用した五つの註説はいずれも後陽成天皇御抄には見えない。しかし通茂聞書では、(b)(d)(e)について

(b') 抄に湖水におほわだ一向似あはず。湊のやうなる所にある也。水のめぐるやうなる処なりと有。

(d') そよくれぬならのこのはの哥、峯の雲麓の霧に色くれての哥、兩首ともに玉葉に入たり。すべて玉葉風雅の哥のかゝり、おほくは詞づかひなども、未来記雨中吟に似たる事おほし。何としてかやうに入られし事やらん。甚不審の事也。（中略）（引用者註。

為兼ら京極派の歌人たちは）制の詞にもかゝはらず、思ふまゝによみて、随分専上にかまへしかども、わづかに此未来記の堺まで入たつたりと見えたり。此子どもを至極面白おもひて、集にも入られたるなるべし。

(e') 色くれての詞、きゝよからず。秋の松風も、松の秋

風といへるはつねの事也。

と記しており、公条説の一部が継承されている。

以上を総合すると、本書は原則として祇註を忠実に受けつぎながら、その内容を補足するかたちでつくられたものであり、独自の註説はかならずしも多く含まれない。当然、後代の註釈書は公条聞書よりもその原典たる遠情抄に就くことのほうが多く、影響力の面では祇註に一籌を輸す。しかし、江戸期に入り、諸説を比較しながら註釈を加えてゆかかたちの通茂聞書が登場すると、(b)(d)(e)のごとき公条独自の説にも光があたりようになった――、と結論することができらう。

3

最後に、聞書の冒頭に記される序註について触れておきたい。

本書における序註の扱いは以下のとおりである。未来記のそれは、遠情抄の説に公条独自の知見を加えてひとつにまとめたもので、全体の冒頭に「聞書」と小書されている。一方、雨中吟においては、内題の下に「此序ハ注本ニアリ」という但書があり、まず遠情抄序註をほぼそのまま引用した後、「聞書」として付記するかたちで公条独自の説が記

される。内容としてはともに未来記、雨中吟の解題や総説を述べたものであるが、公条聞書に特徴的な部分を左に抜粋してみる。

別書前に詠歌大概に耄味の覚悟に随て在_レ之。これか古今正説_ヲ也。古今相交_テ在_レ之。正躰_ト云事也。如_レ此は云て。未来記とてかやうに分別して三世をかゞ見_タる也。仏ならては三世をかゞみ_タる事はなけれども。定家卿は和哥のみちをかゞみ見給也。(未来記聞書)返々哥は風躰のあしきを嫌こと也。かづを十七首にさだめらるゝ事は、太子の御憲法をかた_レとる儀にや。

別書雨中吟は未来記の中には。風躰をいふ事也(中略)崇尊親王の御歌も風躰悪しく可_レ成と為家卿被_レ申たれば。如_レ案其分に成タルト也。たゞいかにも風躰を能々可_レ思事也。云々(雨中吟聞書)

詠歌大概に示された歌風が古今変らぬ「正躰」であるとする書出し、「崇尊親王の御歌も風躰悪しく可_レ成」とする為家の発言、いずれも未来記、雨中吟の古註釈において類例を見ないものである。しかし、それ以上にわれわれの目を引くのは傍線を施した部分であろう。

定家が末世の歌風を予見して未来記を記したとする説そのものは、古註釈のなかになかりひろく見られ、さして奇とするには足りない。しかし「三世をかゞみ_タる」とまで

讀え、暗に「仏」と比肩するかのとき存在として撰者定家を描く本書の態度は、やはり異様なものと言わざるをえないだろう。また、雨中吟の歌数が十七条憲法をかたどっているという説は、すでに遠情抄が指摘するところではあるが、これとても、右のごとき未来記聞書の態度と照しあわせるとき、そこに本書独特の性格とでも呼ぶべきものがうかびあがつてくると言えはしまいか。

「未来記」という題名を持つ書物は、定家撰と伝えられる歌書が唯一のものではない。有名なものでは中世期に聖徳太子作として伝えられたいくつかの書物があるが、それらはいずれも過去の歴史を踏まえたうえで、来るべき未来、特に世界の終末ともいうべき末世の様相を描く予言書の一種である。一群の所謂聖徳太子未来記が聖徳太子に、野馬台詩が梁の宝志法師に仮託されたように、こうした中世未来記は、超越的な人物が常人には思いもおよばない霊力によつて世界の終末を幻視し、それを予言するという枠組みのなかで偽作され、享受された。

「三世をかゞみ_タる」仏のごとき存在としての撰者定家。あるいは「太子の御憲法をかた_レとる」と註せられた雨中吟。それらはいずれも、未来記、雨中吟なるものが、歌書としてのみならず、同時に中世未来記のひとつとして、公条にとらえられていたことを示唆する。むろんそうした本書の

態度が直接註説のなかにあらわれるものでないことは、すでに述べたとおりである。原則として、公条聞書は遠情抄に説くところを忠実に受けついだ書物である。だが、遠情抄と公条聞書との違いをあえて論ずるならば、そもそもこの二書のあいだには、未来記、雨中吟そのものにとらえかたにおいて、いささかの差があったと言えはしまいか。遠情抄にしても、未来記、雨中吟を歌書にして未来記の一種と考えていたであろうことを、稿者は否定しない。しかしながらそれは、公条聞書の態度に比べて、より歌書としての性格に重心を置くものであった。

現在のところ未来記、雨中吟についての先行研究はごく少なく、古註釈の紹介、翻刻も一二を除いてほとんどない。和歌研究における未開拓の分野というべく、今後の発展が望まれるところだが、その際にこれらを単に歌書としてとらえるだけでなく、中世未来記の一種としてよりひろい視野からの考究を加えてゆくことで、あるいは本書にも新たな価値が見出されるのではないかと期待している。

（註）

（一）以上の伝本のほか、『弘文荘待賈古書目』第十三号に「百人一首称名院聞書」一冊（足利末期古写本）を掲げること
は、すでに赤瀬氏が解題の註において触れておられる。

（二）後述する後陽成天皇御抄には、「貫躬は躬恒が時代の歌かとおもへば、貫之の自分の歌なりと云心也。此口伝、逍遙院講談を称名院聞書にあり。三条西家へは三部抄の切紙を宗祇相伝せざると見えたり。当流三部抄の切紙、宗祇より明鏡也」とある。公条聞書の説として伝えられる内容は中院文庫本及び文学部本に見られないものであり、この点やや疑問が残る（右の作者名に関する註説は通茂聞書でも紹介されているが、遠情抄には見えない）。また、切紙云々の記述も目を引く。

（三）以下本稿における遠情抄及び中院通茂講未来記雨中吟聞書からの引用は、京都大学附属図書館中院文庫蔵本（請求記号VI 147及びVI 161）に拠る。ただし漢字の字体を現在通行のものに改め、濁点、句読点を補った。また傍書、見消し等はこれを略す。

〔付記〕本稿は佐藤明子、森本晋、中村健史の三名による共同研究の成果であるが、解題については代表して中村が記した。したがってその責は中村一人の負うところである。

（さとう あきこ・本学文学研究科修士課程）
（もりもと しん・本学文学研究科修士課程）
（なかむら たけし・本学文学研究科博士後期課程）

翻刻凡例

一、読者の便を考慮して、以下の処理を施した。

a. 被註歌の冒頭に、新編国歌大観による歌番号を算用数字で付した。

b. 適宜一行空白を置いた。

二、漢字・平仮名・片仮名の別、送仮名、添仮名、仮名遣、清濁の別、傍訓、傍書、小書、空白、字下げ等の書式は底本のままとした。

三、字体は以下の基準に従って翻刻した。

a. 原則として、漢字は現在通行の字体に統一した。ただし「歌」「哥」など一部の異体字は底本のまま翻刻してある。

b. 片仮名の異体字は、すべて現在通行の字体に置きかえた。

c. 踊字は、平仮名の場合には「ゝ」、片仮名の場合には「ゝ」、漢字の場合には「々」、二字以上の場合には「く」に統一した。

四、底本における各種の記号は以下のように処理した。

a. (長点) によってあらわす。

b. (返点) 底本のまま。

c. (傍線) 省略する。

d. (濁点)「・」によってあらわす。ただし漢字に施された濁点についてはこれを翻刻せず、【校異】のなかで触れることにした。

e. (句読点) 底本における句読の切りかたにしたがつて「。」を付した。

f. そのほかの記号は【校異】のなかで説明した。

五、底本において朱で示されているものは、四に掲げた記号及び一部の傍訓にかぎられる。それゆえ朱墨の別は以下のように示した。

a. (記号) 墨で記されたもののみを【校異】のなかで指摘した。

b. (傍訓) 墨書は明朝体、朱書はゴシック体であらわした。

六、翻刻の際、私意に施した記号は以下のとおりである。

a. 補入された文字は()に囲って示す。

b. 見消ちは「削除」といったかたちであらわす。

c. 虫喰、二重書き等を推測して読んだ文字は、 に囲って示す。

d. 欠字は「何字欠」としてあらわす。

七、底本に記されている註は、【傍註】【頭註】の部分に翻刻した。ただし傍註については、被註箇所を「*」で示している。

八、底本のあきらかな誤りと思しい箇所には「(ママ)」の傍書を施した。ただし対校本においてしかるべく改められている場合にはこのかぎりではない。

九、文学部国語学国文学研究室所蔵本を対校本とし、底本との異同を【校異】の部分に註記した。

a. 対校本を「文閲」と略称する。

b. 註記の冒頭に示された丸数字は、その異同が存在する行数を指す（序註では書名のある行を、歌註では被註歌が引かれる行を、それぞれ①とする）。

c. 未来記及び雨中吟の本文については新編国歌大観（「大観」と略称）との校異を示す。

十、【校異】における異同の註記は以下の基準に従う。

a. 以下に掲げるものは、特別な例を除き註記しない。

①漢字・平仮名・片仮名の別。②字体の違い。③仮名遣の相違（ンとムの別を含む）による表記の相違。④踊字が通常の仮名に置きかえられている例。⑤小字が本文と同じ大きさに改められている例。ただし八の但書きに該当するものは右のかぎりでない。

b. 底本に見消ちで示されている文字が対校本において省略されている例については註記しない。ただし、底本で補入されている文字が対校本において本文に取込まれている例は、これをすべて掲げる。

c. 底本に示されている記号（四に掲げたもの）及び傍書された訓・送仮名・添仮名の類は、対校本において一律に省かれている。それゆえ右については、①底本とまったく同じかたちで対校本に書込まれている例、②一部のみが省略されている例、のみを註記した。

d. 対校本では朱が用いられていないので、異同の註記に際して、特に朱墨の別を示すことはしなかった。

未来記

朝書井 振注 丁蘭之

前和歌得業生柿本貫躬

前に詠歌、大概に毫味の覚悟に随て在^レ之。これか古今正説^{タル}也。古今相交在^レ之。正鉢^ト云事也。如^レ此は云て。未来記とてかやうに分別して三世をかゞ見^レたる也。仏ならては三世をかゞ見^レる事はなけれども。定家卿は和哥のみちをかゞみ見給也。得業と云は。江家。管家の人の。明法明行得業ノ生^{文部博士也}。学文科を給^テする事也。其後文をか^レせらる^レ也。今度九題する者の事也。明行^ハ読書^ノ事也。五経のほか七経を明らめたる者を被^レ成也。和哥得業^トハ此道を究^ル人の事也。今度和歌のきう^{九題也}だいをもせうずる人の事也。古歌の長高く優にたゞしく哀もふかき鉢をば似せずして。新しくしなさむとおもふ心ばかりにて。いかにもいりほがなる正風鉢のすがたは不^レ及申。変風境までも不^レ及。心えぬ事をいひ出し。又近來ノ人の哥をぬすみ取て。我よみたる顔をせうずる事。末代の人の心をふかく悲しみて。定家卿。後学末生の心をかゞみ^見て誠のためにし給也。

【校異】③開書―ナシ（文閲） ⑤明行―明経（文閲） ⑤九題―及第（文閲） ⑥明行―明経（文閲） ⑧心ばかりにて―

心はかりにも（文閲） ⑧いかにもいりほがなる―いりほかなる（文閲） ⑨かゞみ^見て―かゞみて（文閲）

1、年の内に春は来にけり一年に二たび霞む四方の山のは

詠哥大概に情以^ハ新^ヲ為^ス先^トある心を。悪く案ずれば如^レ此成也。此哥古今卷頭の哥を取也。詠哥大概にも雖^モ為^ト三二句不^レ可^三詠^二之^一由云る詞を。結句三句まで其まゝいへる也。一年に二度かすむ。余なる詞也。たゞ世を恐れぬ人の。しいづべき事を。かゞみていへる也。

2、打いづる涙の水ときは山声に色あるうぐひすの谷

くせたる詞也。替るみちもなうて。読出る是也。これは、鶯の涙の水打とけてふる巢ながらや春をしるらん。といふ本哥をとれり。此哥はいかにも幽玄なる哥也。涙のこほり常盤山秀句一段ノ悪く聞にくき也。谷の鶯といはうずる所を。不^レ珍として、うぐひすの谷。以外ノ悪^キしわざ也。

3、 たが春と岩本すげの子引して引まのゝ辺の松の一人

此哥一句つゞみれば無_レ疵也。吟じてみれば秀句に結ばれて悪也。無心初着の哥也。物をつぶくと未_レいへば無_レ曲と思ひて。かやうにいへばあしき也。いりほがに案ズレバ。皆如_レ此なる也。つぶくといへば不_二面白_一トテ悪く案スレハ如此也。

【頭註】片ワレ月ノカタワレハ落テモ水ニ有ケル物ヲ。

【校異】②無心初着―無心所着（文閲） ②本_レいへば―いへは（文閲） ③つぶくと―長点が左肩にも付されている（底本） ○頭註―ナシ（文閲）

4、 きえがてのしら雪青き若草に小忌の衣をきたる御狩ば

白雪のあをき。先以外のつゞき也。をみの衣をきたる御狩場といへる。此小忌の衣は。着する事折々かはる事也。いづれも神祇也。かりばに小忌の衣きたること聞ず。たとへば小忌の衣とは。地の白きに。青ずりをしたる物也。若草の雪萌出るを。小忌の衣に似せたる。更につきなき事也。一向に哥のすがたにあらず。尤心はさかるべき躰也。あをきといふ詞。又よろしからず聞えたる也。是も詠哥大概に人未_レ求_レ詠_二云所_一を。いかにも新しくしなさんとて。あしく案ズレハ如_レ此なるなり云。

【校異】④一向に―一向（文閲） ⑤人未_レ求_レ詠―人未_レ詠 ⑤いかにも―いかに（文閲）

5、 時しあれば暁かけて鶯のこゑする花を人やおるらん

此哥は 待人もこぬ物ゆへにうぐひすの鳴つる花を折_レてげん哉と云。古今の哥をとれり。本哥は優に面白哥也。大略其心ながら（暁）かけて人やおるらん。入ほがなる躰也。時しあればと云五文字心不足也。時しもあれなどゝこそいひ度也。

【校異】①花―花（文閲）・梅（大観） ③（暁）かけて―暁かけて（文閲） ③時しあれば―時しれは（文閲）

6、桜花よもの山のは咲みちて富士のすがたに匂ふ白雲

此哥は毎句きれく不_レ可_二然_一姿也。是は御芳野の花の盛をけふみればこのしら根に春風ぞ吹_トある。俊成の哥を本歌に悪く取成たる也。富士の姿_ニ匂ふしら雲。あまりなる事也。言語道断のあしきすがたなり。

【校異】①匂ふーかゝる（文閲）・匂ふ（大観）

7、吹わたる雲のかけ橋とだえせず散か吉野の嶺の桜木

花の散を、雲のかけはしに取なすか。あまりなる也。さくら木とゝまるも。是又よろしからず。

【校異】②さくら木ー「木」に濁点が付されている（底本）

8、けさ霞よし野の麓たち籠て天つ空行花の白雲

今朝かすみといひ出したる。先よろしからず。今朝のあさけなどいふは。同事ながらかさなれば。優にきこえたる也。よしのゝふもとと是又おしつけたる詞なり。以外之事也。天津空行花のしら雲。悪き詞也。

9、里の名に昔をとへば山吹のこたへぬ色の露の玉札

是は山吹のこたへぬ色に露おちて里のむかしは問かひもなし。といふ哥をとれり。露の玉札又以外也。

10、春は北秋は南へとぶ鳥のあすかや三月暮て行らん

鴈を其まゝよまずして。新しくせんと云たてたるも中々おろかにや、あすかやゝよひといへる。またいひおほ_レせずこそ。

【校異】①とぶー「ぶ」の濁点は墨書（底本） ②おほ_レせずーおほせず（文閲）

11、夏の来て卯花しろくぬぎかふる衣ひるらし天のかく山
衣ほすてふ天のかく山といふ名哥を其まゝにて。ひるらしと云かへて。詮としたる詞。ことにみぐるしく聞えたる
也。夏のきてといふ初の五文字是又よろしからずきゝにくきなり。

12、郭公なくやさ月の夜の程を明しやかねの声もほのく
此三句無下のたゞ詞也。四五の句不_レ及_二沙汰_一、夜_二のほど_一云こと葉。以外_云あしきなり。

13、おもふべし花橘の軒ふりて昔にたどる袖の香の夢

先五文字惡也。下句は、夢も昔のそでの香ぞするといふを、袖の香の夢とつゞけたる。心も詞も其專なし。

【校異】①昔にたどる―昔にゝたる（文閲）・昔にたどる（大観）

14、鐘くらき野寺の杉の木の間より山時鳥こゑのおちくる

先、鐘くらきと云五文字惡也、野寺の杉の木の間。これ又不_レ及_二是非_一、山時鳥こゑノ落クル。余過たる詞也。

【校異】①野寺の―野寺の（文閲）・野寺を（大観）

15、五月雨に舟ちも遠くたつ波のをのれたゆたふ志賀の大わた

水海に、大和田一かう不_二似合_一湊ノやうなる所にある也。水ノめぐるやうなる所也。しがの海などは。いかにもしづかなるさまに取なしてこそ似合はべれ。をのれたゆたふ先惡也、五月雨に舟ちの遠くなると云事も。事ゆかぬ事也。

16、これは秋かいざゝむら竹そよ今夜夏とも告よ臥待の月

先五文字。是は秋か以外之たゞ詞也。いざゝ村竹とつゞく。秀句又よろしからず、そよこよひ聞にくし。面白がらせんとするほどに。風情しとやかにもなくなりて。さたのかぎりなり。

17、とまれかしゆく方しらぬ蚊遣火の煙ぞ空にみちの旅人
旅人の用さらによりつかずや、煙ぞ空にみちのなとつゞきたる。以外よろしからずきゝにくし。

18、やよいかながめの空も夏かけて玉銚しろき露の夕顔
此三句は秋のやうなり、露の夕がほことのほか悪也。夕露の露といはうずることを云々。

【校異】②夕露―「露」に濁点を付す（底本）

19、夏衣木々のはやしの枝つゞき遠近とよむせみの諸声*

先五文字、夏衣木々の林以外也、えたつゞきあまりに取こみて聞にくし、どよむ是悪し。日本記にとよみどよむと在之
下のをば濁て読也。せみのどよむ。一かう不_レ似合こと集なり。

【傍註】清濁同前也。

【校異】①木々―「々」に濁点を付す（底本） ②木々―「々」に濁点を付す（底本） ②日本記―日本紀（文閲） ②とよ
みどよむ―最初の「と」は左肩に「。」、二つめの「と」は同じく左肩に「。」を付す（底本）

20、いづみ川千年の命いくしたてみかの原ふく風ぞ涼しき

いくしたては五十の事也、いづみ川千年とつゞく以外悪也、いのちいくしたても。にくき風情也、三日、原ふく風。是も
悪。

【校異】①いづみ河―「づ」の濁点は墨書（底本） ③悪―悪也（文閲）

21、しづのめがをるや衣の朝明に袖もまどをの秋の初風

をるや衣ノあさとつゞけんためにや不_レ宜。惣而朝明と云詞不_レ好也。不_レ可_三詠_二之_一。未来記にて聞えたる事也、袖も

まどをのもつゞきおぼつかなし。おさをあらみと云てこそ。本哥にも叶^レ津^{（あ）}。小^{（あ）}叶はべるべけれ。

【校異】②と云詞―本と云詞（文閲）③まどをのも―まとをの（文閲）③と云てこそ―と云て（文閲）

③叶^レ津^{（あ）}。小^{（あ）}叶

22、小^{（あ）}庭にかたしきかぬる夜を寒みい^{（ま）}や衣をうぢの橘姫

かたしきかぬるよをさむみ。以外よろしからず。下ノ句又悪しよく可^レ思事也。

【校異】①い^{（ま）}や―今や（文閲）

23、とを山の（寛）樋をつたふ鹿の音もともになるゝ水の白波

遠山といふ五文字聞も不^レ及鹿の音のかけひをつたふことのほかの事にや。又鹿の音流るゝも、（カケ）樋ノ白波
もいかゞ也風情を好むより。かやうの事出来する成へし。能々工夫すべし。

【校異】①（寛）樋―かけひ（文閲）②（カケ）樋―かけひ（文閲）

24、夜はに鳴鹿の音とをす板間より月影ながら、ふく嵐哉

鹿の音とをすいたまあるべからず、吹あらし哉もすでに禁ぜらるゝ詞にこそ。たゞ任^{（あ）}雅意^{（あ）}之条。後人の心なるべき
を。はかりよめるなり。

【傍註】制ノ詞也。

25、いく夜月我衣手にかけ馴ぬれて物おもふ有明の床

ぬれてものおもふもつゞきよろしからず、在明の床又おなじく。上句も幽玄ならずや。

26、御芳野の秋すまじき夕暮はすぐふく嶺に嵐立也

みよしの、秋ことなる事なくて如何。秋すさまじきもよろしからず。下ノ句、今夜たれすどふく風を身にしめて芳野の岳の月をみるらん。これをとられたる歟。とりそこなひたるとみえたるうたなり。

27、秋ぞかし露のよすがに風散て月吹よひの袖のかたしき

五文字先よろしからず、風散て又如何、月ふくよひ。ことに聞をやばす聞にくし、露のよすが悪也。

28、下葉おち踏分がたき葦かならず声に秋は暮つゝ

きりの葉もふみがたくを。かやうに取そこなへる事口惜こそ、踏分がたききりくす以外下句さま悪也。

29、をきそむる籬の菊のかごとだに半は霜の下染ぞ憂

菊のかごと聞にく侍る。ウヘシタ上下(句)した染。菊にいひ馴ても聞えず。惣別の理たゞしからず。

【校異】①かごとだに―「だ」の濁点は墨書(底本) ②上下(句)―上下句(文闕)

30、ゆく秋は今夜いなばの山なりとやすらへ草の枕結びて

行あきと云て又、こよひいなばと云も同心也、山成と、いへるも詞手づにて。片言のやうに聞えたる也又、あきノ草

枕むすばんといへること。事過たるにや。後鳥羽院御哥 誰をまつちの山なりと寝なまし物を山端月。

【傍註】此とノ字以外也。

【頭註】此御哥とは共なり。

【校異】③山ノ端ノ月―五字欠(文闕)

31、山は冬残るともなき一村の錦もあだにあらし吹也

山は冬とをきけるもいかにぞや。此哥は、唐錦秋、かたみや立田山散あへぬ枝に風吹也。此哥をとれり。大方是は聞え

て。未来記まではいかゞとおぼえ侍れど。あまりに錦の縁なくや。うたはえんの詞などにてこそ。こと葉もやさしくなるやうの事はべれば。かやうなるは不_レ宜。さながら本哥に別のことなし。

【校異】③などにてこそ—などにてそ（文聞）

32、道_レ芝や霜枯はてし跡やいづれ誰にとばたの面がはりして

みち芝やといひ、跡やいづれといへるかしましくや。狹衣_ヲ、たづぬべき草の原さへ霜枯て誰にとはまし道芝の露。此うたをとれりとみゆる、たれにとばた。事のほかの秀句みぐるしくや。

【校異】①とばた—「ば」の濁点は墨書（底本）

33、風渡る蘆の枯葉にとだゆ也難波の春の夢のうき橋

是は西行哥_ニ、津ノ国の難波の春は夢なれや蘆のかれ葉に風わたる也。此哥をとれりと聞えたり。夢ノうき橋を、蘆のかれ葉にかくる事。おもしろくあらんとノ心かへりて。見ぐるしくや侍らん。異風のかぎりなるにや。

34、夜たゝ鳴波まの千鳥塩風に吹かへさるゝ浦のはつ嶋

よたゝなくと云詞。古きこと葉ナレドモ。よからぬ詞也、波_ヲの千鳥の、まの字又如何、吹かへさるゝ浦のはつしまとつづくはくずの葉などのやうに聞ゆ。哥のさまいひおほせられぬ事にこそ、嶋_ノのはつ嶋つきなくや。古き哥をおもふべきことは。かやうにあしくつゞけ侍らんとにはあらず。先賢のをしへを。いかにも了智すべき事にこそ。

【校異】③嶋のはつ嶋—「字欠」のはつ嶋（文聞）

35、さえ暮る洲崎にたてるさき玉の津にをる舟も水閑つゝ

さきたまの津は名所也。其を洲崎にたてるといへるは。驚_ニとりなしいへるにや。津にをる舟。万葉に、みさこゐる洲_ニをる舟などよみ侍れど聞よからず。古跡ならんとは。聞にくき事をとり出し。珍しからんとはいひにくき秀句

を好むことを。いましめんのためなり。

【傍註】聞書。郡ノ名也。

【校異】②洲崎に—洲に（文閲）

36、雪しろし曉ふかく人園に千里の月のほくの山

是は詩ノ心を其まゝ也。曉入ニ梁主園ニ雪満ニ郡山ニ夜登ニ庾公之楼ニ月明ニ千里ニ。かやうの事も余ニそのまゝなる事は悪き事也。又ほのくの山。例の事也。哥よまん人は。能々つゝしむべき事也。

【頭註】朗詠也。

【校異】②曉入ニ梁主園ニ雪満ニ郡山ニ夜登ニ庾公之楼ニ月明ニ千里ニ—曉入ニ梁主園ニ雪満ニ郡山ニ夜登ニ庾公之楼ニ月明ニ千里ニ（文閲）

37、わたづ海の海士のまくかた久堅の空ふる雪を重ねてぞしく

まくかたの事。六百番にさまのさたある事也。まてかたにてはべるべし。其を、まくかたといへるも。おしたる心にや。又、久方とつゞく事誠に人ほがの重詞也、空ふる雪も不レ宜悪き詞也。

【校異】③誠に—誠（文閲）

38、しら雪も降つむかの道絶えてけふこぬ人を松の下おれ

ふりつむかの。如レ此よみにくきやう。よみもとかれず、松の下おれ。雪にはさもやはばらんれども。いひつゞけてさらに専なき事也。よくく分別をくはへて吟味すべき事なり。

【校異】②よみもとかれず—よみとかれず（文閲）

39、里は荒ぬとはぬながめの雪の中を誰ならはしと暮はつるとし

此第二の句よみもとかれず（からず）とはぬながめノ雪の中と詞つゞき其理みえず。下ノ句の心又不レ明いひつゞけて

みるに。するくくと聞えぬ事。第一の嫌事也。

【校異】②よみもとかれず（からず）——よからず（文閲）

40、ふる山の千尋の松のたがみそぎ此ゆふつけて積る白雪

ふる山のとほ名所か如何。古今に、たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣と云哥を取て。し出たりとみゆ、松のたがみそぎ心えず。一向無心初着のさまとやいふらむ。

41、夏虫を袖につゝめる玉ゆらもいはゞや物を人にしられて

寂連が、袖に蛸をつゝみてもといへるを。めづらしくとりかへんとて。つくりにへるさま也。上手のうたを取かへんとせば。かならずかやうにはべるべき也。学者よく可思、いさめ也。夏虫を袖につゝめると云て。又玉ゆらはなどいへるさま。悪き秀句なるべし。

【校異】③べき——「べ」の濁点は墨書（底本）

42、かげばかりみうらさきなるねつこ草下に萌つゝ年はへにけり

万葉に、芝付のみうらさきなるねつこ草と云哥あり。是をとれり。先にもいへることく。万葉に優に長高を恋ながふべきを。異相の物をとりいづること。後生のいたす所也。此草いかなるものともしらず。是を可尋。又何かはせん。

【校異】①けりーけり（文閲）・つつ（大観）②恋ながふーこひねかふ（文閲）③いづるーいへる（文閲）③此草——此草は（文閲）

43、我恋はおほや河原のいはひづら手にはひけどもぬるよしもなし

これも万葉に、いるまちのおほや河原のいはひづらひかばぬるくゝわになたえそね。上野のかほやが沼のいはひづらひかばぬれつゝあをなたえそね。此二首。いるま^ちは人間の郡のみにや、かほやが沼も名所也いづれも水辺草とみ

ゆ。長くて引ものにや。ぬれくといふ、ぬれつゝと云も。心はたとひぬるゝとも。我になたえそと云心_ニや。かゝる哥。本哥もさらに優ならず詮なくや。まして是を取出て詮とすること。心のほどもみえはべるべし。此、おほや河原もあづまの名所とみゆ。ぬるゝを。ねぬるによする成べし。返々かゝる心。よしなきこと也。

【頭註】わには。我也。ぬるくは。ぬれつゝ也。

【校異】②ひかば―「ば」の濁点は墨書（底本）

44、恋の道踏しつけこか手玉なくしほる涙や淵となる瀧

しつけこと云は。人の事にてこそあるらうといへる事なり、手玉なくとは。機などの事也。物を織機也。水の隙なく也。たゞ隙のなく落る涙といはん為か、淵と成瀧と留事。更ニ哥ノやうにもなき事也。

45、長き夜も明なむとするかねこともまだつきなくに袖ぬらす空

明なんとするかねこと。家隆卿哥に、限、あれは明なんと（スル）鐘のをとに猶長き夜の月ぞ残れる。とあるをとれるにや。二句うつる所ことに耳にたちはべる也、まだつきなくにも。古_キにはあれど聞よからず。

【校異】②明なんと（スル）―明なんとする（文閲）

46、風さはぐゆらの湊を漕舟のうきて物おもふ身ぞ行衛なき

此哥は曾禰好忠が、ゆらののを渡る舟人かぢをたえ行衛もしらぬ恋のみち哉。の哥をさながらとれり。かやうには云べからずこそ、身ぞ行衛なきも。詞つまりてよろしからず。行衛なき身といはんは。所によりてやさしくも可_レ侍也。

【校異】②哥―本哥（文閲）

47、人はいさ昨日の雲の跡もなくけさはきえぬの夢もはかなし

此哥家隆卿、思出よ誰かねことの末ならむ昨日の雲の跡の山風。是をうらやみてとれるとみえたり。かやうにまちかき

哥どもを。ゝそれず取事可^レ有^レ憚^レ者也、けさはきえぬのなど。さらに聞もならはぬ詞にや。

48、夕暮はつらき嵐の宇津の山思ひをたれに薦の下道

定家卿の、アデキナクツラキ嵐ノ声^ミウシナド夕暮ニ待ナラヒケン、夕暮はつらき嵐の宇津の山思ひを誰にわたの下道。此哥を取るや不^レ可^レ然^二下^一句、おもひを誰に薦のした道。つたへんと云心にや。一かう事たらぬやうに聞えて以外^ノの事也。

【校異】②（アデキナクツラキ嵐ノ声^ミウシナド夕暮ニ待ナラヒケン）夕暮はつらき嵐の宇津の山思ひを誰にわたの下道
あちきなくつらきあらしのこゑもつしなとたくれに待ならひけん（文閲） ③取るや―取る也（文閲）

49、あだ人を松に嵐の吹かねて色にみすべきことの葉もなし

是は慈鎮和尚の、松を時雨の染かねてを。うらやみとれる跡也、ふきかねて以外の物にきこえたる也。

50、うらがれの庭のむら萩あき暮て人の心の跡の山風

是も慈鎮家隆の、両首を上下に其まゝをけるさまのあまりにや。惣じて古き哥を取も其時代又故実^ミはへるべし^云まして此比の哥を皆取読べき人の心をいましむる也。学者を恥おもふべき事にこそ^云。

【頭註】^ミ我恋^ハ庭のむら萩――^ミ（思イデヨタガ、ネコトノ末ナラン）昨日、雲の跡の山風。

【校異】③^ミ―ナシ（文閲） ○頭註――^ミ我恋は庭のむら萩――^ミ思イデヨタガ、ネコトノ末ナラン昨日の雲の跡の山かせ（文閲）

雨中吟

此序ハ注本ニアリ

この十七首は未来記同前にははべれと。別に此名を雨中吟と号すること。可_レ得_二其意_一子細在之。この書は。名のほかに牀なく。牀のほかに名なしといへり。牀とは歌の風牀也。此牀を雨声暗明の牀ともいへり。風牀のあしきをしらしめんのをしへ也。たとへば。霖雨物むつかしくうちおほふ様にして。くらきとみればあくなり。明かなりと見れば又暗く成て。朦々としていひしらず。心もたとくしく。山川草木の気色。鳥のこゑなどにうちしほれたるやうの時あり。さやうの時節はあらぬうれへもそひて。物いまくしき心ある也。この十七首の歌。みな心たどくしく理りみえず。おもひとくもとかれず。たまぐ聞ゆるやうなるも詞とをらず。むすぼるゝやうにあるを。雨中吟_ノ心にたとへて。雨中吟といへる也。かならず雨中をあしきといふにはあらず。さびしくものあはれる心もあり。又おもしろき心も雨にはあるもの也。又悲しきさまをよみて。それが感にもなる事あり。詩にも盧山_ノ雨夜草庵_ノ中など(云)も心あるさま也。又俊成卿_ノ歌に、むかしおもふ草のいほりの夜の雨に涙なそへそ山郭公定家卿の哥に、春雨に木の葉みだれしむら時雨それもまぎるゝかたはありけり。これも春の雨のさびしさいたりたるが感となれる也。たゞ雨の降さまにて。あはれにもおもしろくも。又心伸くもりはてゝ。心ぐるしくいまはしきやうのこともあり。風牀のあしき歌を。霖雨の中_ニ作(の)心にたとへたる者也。後生の人は皆詞をめづらしく心をふかくと案ずる所正路にはなくして。首尾せぬ所あるべきを。いましめんのをしへ也。返々哥は風牀のあしきを嫌こと也。かづを十七首にさだめらるゝ事は。太子の御憲法をかたとる儀にや。

留書

雨中吟は未来記の中にては。風牀をいふ事也。濫觴_ノ花時盧山_ノ雨夜草庵_ノ中と云詩も。白楽天が盧山_ノ籠_ニて作詩也。思の中

ニハ其心に成トいふ事也。崇尊親王の御歌も風牀悪しく可_レ成と為家卿被_レ申たれば。如_レ案其分に成タルト也。たゞい

【校異】⑤しほれたるしれたる(文閲)

⑨事あり事也(文閲)

⑨など(云)も一など云も(文閲)

⑫中_ニ作(の)一

中の(文閲)

⑮濫觴_ノ蘭省(文閲)

⑯崇尊_ノ宗尊(文閲)

1、またれ行光に遅き月よりも雨に聞ゆるをぎのをと哉

待るゝ月のためよりも。雨に萩の音の聞ゆるが悲しき_トの心か。たとへばさこそはべらめど。慥に不_レ聞。萩の歌は只

いく度も。風をこそよまうず事なれ。其を不_レ珍とて。雨にてよむ事邪路也。末世の人の心を誠のためいふ事也。下句一段又愁はしき姿也定家卿の近代の秀哥_ノ詞に。後学の人の歌は。安かるべきを。ちがへはなれたる事を。つゞけうずる故に。哥のさまよろしからぬ事を記をき給也。此荻_ノ雨たゞ其心なり。

【校異】①光に―光も（文閲・大観） ②只いく度も―いく度も（文閲） ③よまうず―よまうずする（文閲） ④其を―其儀（文閲）

2、打しめり薄のうれ葉おもりつゝ西ふく風になびく村雨

是も愁の躰也。先すゝきのうれ葉不_レ宜。大方一村薄など。むら雨の露かゝりたるやうなどは。其興もあるやうにはべらんを。しめりはてゝおれ臥たるやうなる比。荒々とにし、風の吹たらんは。物うらめし。愁恠たるやうにこそ待るべけれ。此歌を風雅集に被_レ入たる也。一条家などには。風雅玉葉などは。手にも取まじき事と也。未来記の中の哥を人らるゝ事以外也。

3、夢くらきしらぬと山の鹿の声さむる枕の雨にたぐひて

此哥は。夢にだにさだかならぬ心ちするに。いづくともなき鹿の声聞ゆると也。誠に哀にもあるべき事を。五文字の夢くらきしらぬと山とつゞきたる以外悪事也。夢くらきと云詞更に其理なし。覚る枕と云詞も。何がさむるぞなと聞ゆるやう也一首を打吟じてみるに。風躰のあしきを能々しるべき也。仕立によりて。正風にも又異風にも可_レ成事也。歌にかぎらず。人も様々あるもの也。風躰あしき人は。よろしき心をも持失物也。能々可_レ思慮也。

【校異】②さたか―「だ」の濁点は墨書（底本） ②声聞ゆる―声の聞ゆる（文閲） ③枕と―枕の（文閲） ④異風にも可_レ成事也。歌にかぎらず。人も様々あるもの也―ナシ（文閲）

4、秋はゆく雨はしづくに降しめて袖のしりける夕暮の空

雨は雲にふりしめては。涙とも不_レ聞。句つゞき事外聞にくき也。袖のしりけると云詞も。いひやうの悪によりて。

以外聞にくゝ成也。一首を吟ずれば物わびしき躰也。

5、いく里の雲に心のかよふらんうかぶとかこつ月は雨にて先、いくさとの雲に心^レのといへる。似(ツ) かず聞えたる也。うかぶとかこつ雲にてこそあるらう也。月は雨にてと留る。ふつぎりなる也。惣別の作意難、分別物むつかしき風情也。

【校異】②似(ツ) かず―似つかず(文閲)

6、暮の秋はしにしたる夜の雨草のいほりの中ならねども先、暮の秋といふ詞。つまりたる五文字也。階にしたるは、雨滴、空海と云詩の心也。つきもなう取出したる也。一、二ノ句、つゞき不^レ宜。下の句又さらく其感なき也。

【頭註】朗詠也。

【校異】②空海―空階(文閲)

7、をやみせず雨夜の空に鳴涙もりぬしほりぬせく方もなし

此(哥) 詞づかひしほり過て。感もなくこそはべれ。下の句殊さら以外にや。能々吟味すへし。

【傍註】モリヌ。シホリヌ也。

【校異】②此(哥) ―此歌(文閲)

8、星もなく雲間もみえぬ夜の雨に猶またるゝは山のはの月

此歌無心初着の哥也。又風躰愁也。此哥まで八首雨を詠する。心は雨中吟の名をかたどる儀也。此末の雨ならぬ哥も。心詞たゞしからで。物のよしも聞えぬは雨中吟の様也。呉々雨中のたとへを能々可^レ知也。此末より九首みな其理不^レ聞。あやめもわかぬ哥共也。其を雨中のたとへと可^レ覚悟也。

【校異】①月―月（底本）・空（大観） ②無心初着―無心所着（文閲）

9、つれく／＼と山路露けき秋風に日影ひとつにかよふはる哉

是より又理の聞えぬ哥也。二三句は冷しき様也。惣而は春に秋を呼いだし。秋に春をおもひてよめる事は常の事也。させる感もなうてよまん事は無曲事也。この歌、露けき山路に秋かぜ吹たらんは。さむさの至りたる事也又さありとおもへば。日影はぬるく／＼としたるやう也。何とも不聞也。

【校異】②秋に春を―秋を春を（文閲） ③さありと―さあると（文閲）

10、そ暮ぬ奈良の木の葉に風吹て星出る空のうす雲のかげ

先五文字以外悪し／＼なら木の葉。木の字不人事を人たる。おもしろがらせんとの心か。一向不事行。吟じつゞけてみるに。風林ことのほかにや。一首く／＼を勘弁すべきものなり。

11、たへてこそ山の深きはながめつれ秋に恠ぬる長き夜の霜

上の句。末にいかなる事かあらんとおもへば、ながきよの霜に。おもひわびたる様。さして其詮もなし。一首をいひつゞくれば。其興もあはれもなし。いかにも山深くゐて。愁ひしほたれつ。かなしみ甲斐なき心のやう雨中吟也。たゞ歌のはれぐしからぬを嫌也。

【校異】②其詮もなし―其詮なし（文閲） ③しほたれ―しほれ（文閲） ④からぬを嫌也―からぬ嫌也（文閲）

12、嶺の雲麓の霧に色暮て空も心も秋の松かぜ

是も皆雨中吟の様也。色暮て不可然也。秋の松風も不宜こそ。悲しきやうをばいへど。心はさらにあはれならず。惣じて。此抄にいへる詞に。一ふしあらせんと云出て。又心に興あらんとする所。相構てかやうに不可詠也。色暮て当時はやる詞也。悪詞也。秋の松風、春の松風など悪也。

【校異】①暮て―そへて（文閲）・暮れて（大観）

13、秋ならず物を思はぬ空までも契りよしなき夕暮の鐘

あきにもならず。物おもふにもあらずしては。なに事か悲しからん。又、何のちぎりともしらずこそはべれ。夕暮の鐘も。哀なる物なれど。詞ひとつに取こみて。不_ニ面白_一。尤もいまはしき様也。

14、とはぬうし忘れぬ悲し鐘の音にたのめも馴ぬ明方の声

上の句の詞づかひ物のかたそばの様に聞ゆるが悪也。鐘の音いひならは（さ）ずこそ。以外之風躰也。

【頭註】音ト云字カシマシキニ依テ。不_レ好詞也。

【校異】①音―音（文閲）①声―声（文閲）・夢（大観）②ならは（さ）ず―ならはさず（文閲）

15、忘れぬらんうらめしと思ひおもふとも待べきにあらずとはんともいはじ

此哥句ごとに。文字をあます。事の詮なくや。下句無下のたゞ詞也。此哥を愚見抄と云物に定家卿の自讃の歌と云説在_レ之。何事に自讃の哥を。此雨中吟_{〔末〕}来記に可_レ被_レ載_レ哉悪説也。つよく手間を入たる物六ヶ敷_{〔了〕}たなり。

【校異】①おもふとも―おもふとても（文閲・大観）

16、いへばたゞまだうたゝねの袖ながら枕もしろき軒の隙く

是は何事をよめりともみえず。つゞきは恋の哥などゝみれば又さもなき也。袖ながらと云て其（末）理みえず五文字又わざとがましくや。惣の理もたしかならず。是又雨中吟の心なり。

【校異】②其（末）―其末（文閲）

17、わけもせじ尋ねもゆかじ今夜など生田のをゝ木枯の風

これは、昨日だにとはんとおもひし津の国のいく田の杜に秋はきにけり。此哥を取る、分もせじの哥一二句まづ不^ス思^シ。心は、いく田の森といへば不^レ珍とて、いく田の小野ト悪し。後学の輩の心をいへる也。又、木枯の風。制の詞也。後鳥羽院秋風に又こそとはめ津の国のいく田の杜の春の明ぼの。惣別問と云詞。かやう春秋の間など此等が初と也。いまあ^マねく詠之也定家卿時代にも。雨中吟未来記の類あり。為^ニ其後学^一に。未来をかゞみて。定家卿此事を被^レ勘置^一たる事也。

【校異】②だに―「だ」の濁点は墨書（底本） ③後鳥羽院―ナシ（文閣） ○この後、新編国歌大観本所収の雨中吟本文には「此風体をさかりにこのみよまむ時、歌の道、はやすたるべき世いたれりとなんしるべし、努努まなぶべからざる体也、このころもかやうのすがた、おのづからみえ侍りかし、仍、後学のために記しとむる所なり」という跋文が見られるが、底本・文閣本など公衆聞書の諸本では省略されている。

（識語）

右此三部者称名院殿御講尺

聞留分記之者也

追而書加之此乃致部大概
有子征取逐別書之

永祿二年四月下旬書之

又此以後大納言重彦朝合之也

桑門泛梗